

はじめに

2013年度の第12回かわごえ環境フォーラムで、かわごえ里山イニシアチブ（以下、かわごえ里山）が設立宣言の発表をしていることをFaceBookが思い出させてくれました。

当時の発表では、設立の目的を「田んぼは、稲作だけではない日本の環境を守ってくれる大切な役割を担っており、このことを普及・啓発するための活動が必要で、水田の生態系を回復する生物多様性向上が今求められており、このため日本の農業や環境を守り人の健康を守るための活動をしていきます。」と宣言しています。

設立から10年を迎え、振り返ってみると、その構想や目的に生物多様性向上を掲げ、ぶれていないことに安堵したとともに、昨今の地球を取り巻く環境を見るにつけ、その活動の必要性に想いを強くしました。



第12回かわごえ環境フォーラムでのかわごえ里山設立宣言（2014年2月22日）

小さな農業が環境を守る

かわごえ里山では、設立以来小さいながらも環境にやさしい米作りにより、水田に関わる生きものの多様性を向上させることを目指してきました。設立から10年目を迎えた昨年の生きもの調査で、生態系の豊かさ指標が大きな数字（40点でそれまでは30点前後）となり、生物多様性の飛躍的な向上が見られたことは驚きでした。生物多様性向上の活動に確信を得た年でもありました。



田んぼの生きもの調査（2023年7月1日）

小さな農業「日高田んぼ女子プロジェクト」の誕生

2023年度のかわごえ里山の新しい試

みとして、主婦、母、働く女性の顔を持つ忙しい3人に、稲葉農法の「誰でもできるいのち育む有機稲作」の基本を教え、みんなで取り組む初めてのコメ作りを全面支援しました。その結果、1反当たり7.6俵（かわごえ里山の通常の収穫量の2倍）を収穫できましたが、それよりも大きな収穫は結（ゆい）の精神でみんなで助け合って楽しくおコメづくりができたことでした。

“目指すのは自然と共に続ける自給農”をスローガンに掲げる「日高田んぼ女子プロジェクト」が誕生しました。小さな農業のモデルケースとしての始まりです。



日高田んぼ女子プロジェクト

「武蔵野の落ち葉堆肥農法」が世界農業遺産に

2023年7月、「武蔵野の落ち葉堆肥農法」が世界農業遺産に認定されました。江戸時代から続けられてきたこの農法は生物の多様性を育むシステムが作られており、この地域で360年以上にわたり続けられたことは、生物多様性農法の範を世界に示したと言っても過言ではないでしょう。

生物多様性戦略に舵を切る千載一遇のチャンス

そこで川越市は、この「武蔵野の落ち葉堆肥農法」を“世界農業遺産”としてだけに終わらせるのではなく、持続可能な生物多様性戦略を掲げる構想を打ち出し、生物多様性による自然環境の向上や農産物のブランド化を目指す方向に舵を切る千載一遇のチャンスではないかと考えています。佐渡の農業は、トキと共生する農業遺産として生きものを育む農法が世界的に評価され、「トキと共生する佐渡の里山」で収穫されたお米が“朱鷺の舞”などでブランド化され、高値で販売されています。

オーガニックビレッジ宣言と学校給食の有機化

かつての川越は雁の里でした。雁は、川越市の市の鳥として今でもその剥製が川越市役所の1階に飾られています。農業遺産を契機に、「トキと共生する佐渡の里山」のように「雁と共生する川越の里山」くらいの意気込みで、環境にやさしい農産物のブランド化を図りたいものです。

そのためには、大きな枠組みとしての生物多様性戦略の下、農林水産省が掲げる「みどりの食料システム戦略」の中で推進する「オーガニックビレッジ」を宣言し、その実行プランの一つとして学校給食の一部有機化を推進していくことが重要だと考えています。

お米や野菜の有機農産物を「地産地消」で循環させることにより、地球温暖化や地域経済、農林水産省が掲げる「みどりの食料システム戦略」による有機農業の耕作面積の増大にも寄与し、一石三鳥の効果があると確信しています。

おわりに

国連環境計画（UNEP）が2021年に公表した統合報告書で「自然生態系を破壊しない農業」、「肥料や農薬を減らした自然に優しい農業」を提言しています。農林水産省は「みどりの食料システム戦略」の中で、2050年までに農薬のリスクを50%、化学肥料の使用を30%減らし、耕地面積に占める有機農業の面積を25%に拡大する目標を掲げました。

今の日本では農薬や化学肥料の使いすぎで土壌が疲弊し、土壌の健全化が損なわれ、地球温暖化を増大させています。生物多様性農法がこれらの課題解決の重要な鍵となると確信し、「日高田んぼ女子プロジェクト」が示すように私たち市民レベルの「暮らしに根ざした小さな農業」が、生物多様性を向上させ自然環境を保全し、地球温暖化を防止する最善の策と考えています。

（NPO法人かわごえ里山イニシアチブ 代表理事 増田純一）



誰でもできる有機稲作 日高田んぼ女子プロジェクトから